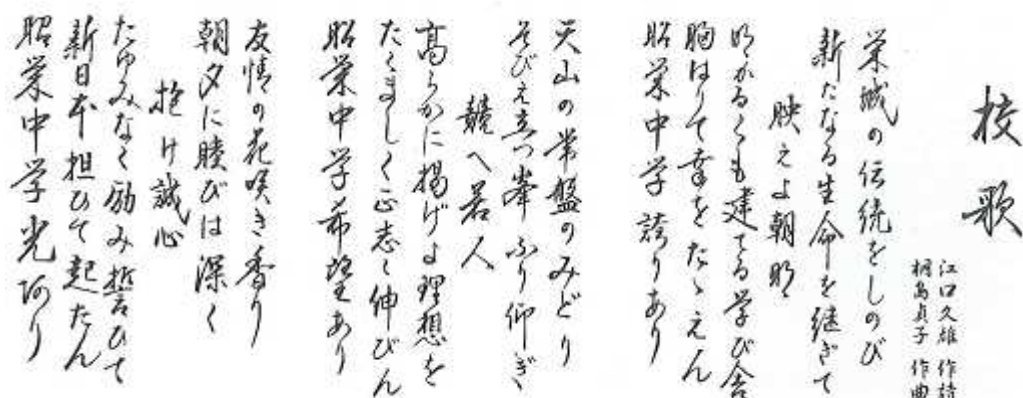


## 校歌の制定について

昭栄中学校創立2年目(昭和29年)の秋、当時の先生方の全員の希望で、校歌が制定されることになりました。作詞・作曲も、先生方の手でということになり、作詞は初代校長の江口久雄先生に、作曲は音楽担当の桐島貞子先生にお願いすることになりました。そして、昭和30(1955)年2月11日、当時の先生方の昭栄中を愛する深い愛情がこめられた「校歌」の発表会がおこなわれ、現在まで多くの卒業生・在校生に歌い継がれています。



(昭和60年度卒業生記念品・事務室前に掲示されています)



作曲者の桐島貞子先生の文章です。

(昭栄中 校舎・外構全面改築記念誌(昭和62年2月発行)より抜粋しました)

創立2年目の秋、職員の間で「昭栄中にも校歌をつくろう」という意見が持ち出された。創立当初の何もない状態から、必要なものが一つずつ解決され、また校舎建設も、第一期・第二期の工事が終わって、内容・外観ともに中学校らしく整えられてきた頃である。

早速、校歌制定の件が職員会に出され、職員全体の賛成を得た。また、作詞、作曲については、いろいろ検討されたが結局、職員の手によって作ろうということになった。

まず、作詞は、初代校長の江口久雄先生にお願いすることになった。作曲については、音楽担当の私にということである。作曲の経験のない私には大変な仕事で、お引き受けするのは躊躇されたが、「職員の手によって作ってこそ、血の通った校歌になるのだ。」と説得されて、校歌作曲という光栄ある仕事を承諾することになった。

校長先生は多忙なお仕事の合間に作詞に当たられ、ほどなく歌詞が完成した。それは昭栄中に対する、先生の深い愛情と、強い願いが、選び抜かれた格調の高いことばで歌い上げられてあった。この歌詞は、漢詩の作法の起承転結が明確である。「栄城の伝統をしのび」に始まり、それを承けて、「新たなる生命を継ぎて」と続いている。つぎに、内容も、ことばのリズムも一転して、「映えよ朝明、明かるくも建てる学び舎」と変化し、そして「胸はりて幸をたたえん。」と、はじめの調子にもどり「昭栄中学、誇あり」と締めくくっている。作曲にあたっては、起承転結に合わせた構成を心掛けた。起の部分に当たる「栄城の伝統をしのび」のメロディーが、なかなか浮かばなくてさんざん苦心したことが今も思い出される。然し、最初の部分が出来ると、あとは少しずつメロディーが出来てきた。今考えると、未経験の私に作曲できたのも、この立派な歌詞に導いて頂いたお陰であると、深く感謝している。明けて昭和30年2月11日校歌発表会が行われ、こうして校歌が誕生したのである。江口校長先生もすでに故人になられたが、校歌の歌詞にこめられた深いお気持ちは、今も歌う人の心に生き生きとよみがえって来ると思う。(桐島貞子)